

平成24年 朝日旧友会新年総会



挨拶する中江会長
左から新会賓代表轡田さん、大野、徳江両副会長、秋山社長、池内東京代表

朝日旧友会報

朝日旧友会
東京都中央区築地五-1-12
朝日新聞東京本社内
〒104-8011
TEL 三五四五-1011
FAX 三五四三-1331

平成二十四年総会予定

〔日時〕 定時総会 五月二十四日(木)
〔場所〕 朝日新聞記念会館(有楽町マリオン11階)
午後1時半から映画「山本五十六」を
上映します。

新年総会なごやかに！ 本社側・会員三百五十人集う

新会賓四十二人を拍手で祝福

東京旧友会の平成二十四年新年総会は、一月十九日(木)午後四時から有楽町マリオン
の朝日ホールで開かれた。寒波襲来の寒い日だったが、午後一時半からの映画「探偵はB
ARにいる」上映前から多くの会員が続々参集、寒さを吹き飛ばす熱気だった。久方ぶり
の仲間が「元気があ、よかった、よかった」と涙を浮かべながら抱きあう姿もあった。

総会では中江利忠会長、徳江英景、大野功雄両副会長はじめ会員三百七人、喜寿を迎えた
新会賓四十二人(出席者二十一人)。本社側から秋山耿太郎社長、池内文雄東京代表ら役
員、幹部四十五人が出席、なごやかに交流を図った。

国のかたち再構築へ
中江会長

頼りは新聞との評価
秋山社長

新聞の役割ことば力
轡田隆史さん

総会では森事務局長の司会で
始まり、まず中江会長が「国
のかたちの再構築へ」「新時
代へ新聞の責任再認識」と題
して旧友会員に語りかけ「こ

としは世界各国のリーダーが
交代する年になる。想定外の
過酷な災害、事故などで各国
の統治、安全能力が問われて
いる。わが国でも政府や東電

の安全能力が不備のため被害
が拡大した」と問題点を提示。
「野田内閣は消費税など重い
課題に取り組んでいるが前途
は多難だ。国のかたちの再構

築にはメディアの責任もある。
社の総力をあげ取り組みまし
よう」と訴えた。
次いで森司会者が今年の新
会賓を紹介、名前を読み上げ、
立ち上がって一礼する人々に
会場からお祝いの拍手が送ら
れた。

来賓として出席した秋山社
長は「震災・原発事故報道に
は総力を挙げて取り組み「頼
りになるのは新聞」との信頼
を得た」「販売は攻めと守り
で活路を開き実配部数で勝負
する」「広告部門は広告主も
増加、頑張っている」との報
告があった。

新会賓を代表して轡田隆史
さんがあいさつ「朝日OBで
いまでも現役で果たすべき自
分の役割とは何か、日々自分
に問いかけている。朝日の役割
はことばで闘うこと、ことば
の力を磨きましょう」と訴え
た。「喜寿だなんて知らずに
いた。感謝します」と語った。
終わって懇親会、タル酒が
開けられ、身辺の話題に花が
咲き、次回の再会に希望を託
し散っていった。皆々さまお
元気で、また五月に会いまし
よう。

「国のかたち」の再構築へ 新時代へ新聞の責任再認識

今年是世界各国のリーダーが相次いで入れ替わるので「スーパーイヤー」とも言われている。大統領などトップの改選・交代が重なるという意味では偶然だが、それ以上に資本主義経済、民主主義、社会政策の行き詰まりや想定外の過酷な災害・事故などで各国の統治・安全能力が問い直される、という必然の局面にもぶつかっている。

その中で昨年十二月二十六日、東京電力福島第一原子力発電所の事故を検証する政府の「調査・検証委員会」の中間報告が公表された。委員長が「失敗学」で知られる畑村洋一郎・東大名誉教授だったこともあり「東電や政府が津波による過酷な事故を想定しないまま対策が不備だったため、直後の対応や被害拡大への防止も不手際だった」と思いついた批判の報告書になった。

原発事故の独立検証に期待

国会も国政調査権を使った事故調査委員会を立ち上げたが、民間でも独立した検証活動がスタートしている。その中で最も注目されているのが、船橋洋一

前朝日新聞主筆がプログラムディレクターを務める「福島原発事故独立検証委員会」である。昨年の「3・11」を受け船橋氏を理事長、北澤宏一・前科学技術振興機構理事長を委員長として九月に発足した一般財団法人「日本再建イニシアティブ」の、第一号のプロジェクトである。両氏を含め七人の有識者委員の下に三十人のワーキング・グループが、ウェブで募る情報提供や現場の意見などを吸い上げた

り、海外の有識者の助言チームの報告も入れながら、今年の「3・11」までに日本語の報告書を、夏までには英語のリポートとしても作成、広く世界に発信するつもりだ。

今回の原発事故とその対応を、企業、自治体、政府、さらには戦後の日本人のモノの考え方に及ぶ「ガバナンス危機」として捉え、その教訓を今後の日本のエネルギー政策、安全保障政策や国家統治とリーダーシップといたった「国のかたち」の再構築に役立たせる、というのが船橋氏の構想。この総括的な独立報

告書の内容を、期待して待たしたい。

米国従属を要するチャンス

そんな中で一月二日にNHKが放送した「2012 震災後日本と世界への眼」という一



中江旧友会会長あいつ

ラウンド・ゼロ」は本来、広島原爆の爆心地を指す言葉だったとし、太平洋・ベトナム・イラク戦争の記憶から脱落している相手国への「大量破壊」による膨大な死者の数や、米国の軍拡・占領政策による加害者の立場の問題を指摘している。

もう一人はオーストラリア国立大学名誉教授のガバン・マコーマック氏。著書「属国」などで日本が一貫して米国の便利な

時間五十分に及ぶ対談番組が、傾聴に値した。共に日本人の妻をもつ知日派の歴史学者で、一人はマサチューセッツ工科大学名誉教授のジョン・ダワー氏。「敗北を抱きしめて 第二次大戦後の日本人」などの著書で戦後日本の民主主義が定着する過程を分析。近著「戦争の文化」では、ニューヨークに建設中の同時多発テロ「9・11」モニメントの名前「グ

従属国に甘んじている姿に覚醒を促したり、「プラトニウム大日本」では、被爆国でありながら六ヶ所村などに核施設を持つて兵器への転用にも可能な「プラトニウム超大国」になつてしまった日本に警告。これに費やされる数兆円の投資を自然エネルギーに回すよう、訴えている。対談の中で二人は、「3・11」が核という人類共通の問題を再認識させたこと、日本の戦後の

国策が米国にリードされた安全保障、経済成長、原発依存で進んできたことを確認。その上で、日米関係は一九五一年のサンフランシスコ講和条約と、同時に調印された日米安保条約による米軍駐留がすべての出発点だったが、その後の冷戦終結や最近の米軍のイラク撤退、中国の台頭による米国のアジア太平洋地域への最重要移行などによって、日本が米国に従属的だった関係を変えるまたとないチャンスが来た」と分析、「バックス・アジア・パシフィック（アジア太平洋）による世界平和」共同体の中で日本は新たなモデルになるべきだ」と提唱した。

二年前に鳩山由紀夫首相が挑戦しながら瓦解したように、「日米蜜月」からの脱皮はいかにも難しい課題だ。しかし、オバマ大統領でも貫徹できない米国の「世界の警察官からの撤退」も新時代の国際良識に訴えて説得し、国連（UN）の機能を再構築しながら原点の「バックスUN」に帰り、「多軸世界の中の独立日本」として再出発させられる

リーダーが、いまこそわが国に求められていると思う。

難航する野田首相の挑戦

顧みて、野田民主党政権による政治の状況はどうか。野田首相が「どの政権であっても避け

て通れない、つらい重たいテーマ」として決断した消費税増税と社会保障の一体改革も、改造内閣直後の本社世論調査で賛成三四％を反対が五七％と大きく上回った。「国のかたち」を改める挑戦がいかに難しいかを、物語っている。

この「国のかたち」の再構築には当然、メディアの責任が欠かせないが、年頭の各紙にも、危機乗り超えに必要な政治のリーダーシップの向上などを訴える社説や連載企画が並んだ。

その中で本紙は、「3・11」後に展開した社説特集「提言 原発ゼロ社会」、長期連載「原発とメディア」などのキャンペーンや検証記事に続けて、民主主義を問い直す「カオスの深淵」や、世界の識者に新しい資本主義や民主主義の在り方を聴くオピニオン特集が展開されて、多くの読者に評価されている。

秋山社長が年頭のあいつで強調した「大震災や世界の大きな構造変化の中であらためて求められる新聞の調査報道強化」の必要性と合わせて、新時代のグラントデザインに向けた朝日新聞の総合力を結集させたい。私たち旧友も現役の頑張りによって差し延べながら、本社の更なる発展に尽くせるよう力を合わせてゆきましよう。

新時代の

社長あいさつ



改革推進を語る秋山社長

東日本大震災では、朝日新聞グループも大きな打撃を受けました。仙台工場の輪転機が壊れ、三陸沿岸の販売店は店舗が壊れ、従業員が津波で流されるなどしました。宮城、岩手、福島の三県を中心に五万部以上の部数が失われ、本紙の広告も大幅に落ち込みました。

震災で復権した新聞
震災報道、福島原発事故報道では、それぞれ新聞社が総力を挙げて取り組み、結果として、「頼りになるのは、やはり、新聞」という認識が定着しました。新聞は取材を通じて、正しい情報信頼出来る情報だけを選択していきます。ネット上に真意の程が定かでない雑多な情報が溢れておりませんが、多くの人々に「頼りになるのは新聞」と思っていたいただいたのは、新聞ジャーナリズムの復権と言う意味で、有り難いと思っています。

編集部門は力のかもった原発報道を続けました。戦後日本の原発政策のそもそかもから調べて、当局が隠そうとしている

事実を探り出す努力を続けました。原発で揺れ動いたメディアの姿勢についても、過去にさかのぼって切り込みました。朝刊三面の「プロメテウスの罠」シリーズや、夕刊連載の「原発とメディア」などがその成果です。批判もありますが評価と期待の方が大きく、「さすが朝日」「大事な時には朝日を読む」という声が多数寄せられました。

拡大されたオピニオン面も好評です。読売ジャイアンツの内紛が表面化するとすぐに、巨人軍のゼネラルマネジャーだった清武さんと、最高実力者の渡辺恒雄さんの大型インタビューを掲載して話題を集めました。「記者有論」や「社説余滴」などの小さなコラムも鋭い切り口のものも多く、私は楽しみに読んでいます。朝刊の二面、三面も読み応えのある背景説明や解説記

事が多くなりました。大國の内情をえぐるリポートや朝鮮半島情勢を深く掘り下げた記事は朝日の「売り物」です。「天声人語」の「書き写しノート」をご存知ですか。最初は販売店の読者サービスとして宣伝していたのですが、評判になって大きな書店でも売っていたり、現在では六十万部を超えてなお売れ続けています。土曜の「be」とともに固定ファンが多い日曜別刷りの「GLOBE」は、この春からコンパクト版に装いを変えて中身をさらに充実させます。

最近の朝日新聞で反響をよんだ記事、あるいは高い評価を得た連載は、いずれも記者クラブから飛び出した記者たちが、手間ひまをかけて、深く掘り下げた取材を試み、懸命に努力した成果です。私は今年の新年の挨拶で編集部門の皆さんに「記者クラブに頼った取材ではなく、独自の調査報道にもっと力を入れてほしい。多くの読者から『さすが朝日』と言われる質の高い紙面づくりをしよう」と呼びかけました。朝日新聞が読者の期待に答えていくには、「どの新聞も同じ」という横並びから脱すること、そして、記者クラブ

に依拠した取材よりも、手回ひまかけた「調査報道」に力を入れる必要があると思っています。本社の経営状況についてご報告します。二〇一一年度上期の中間決算は、震災で広告収入が大幅に落ち込んだことから、営業損益、最終損益ともに赤字でした。しかし、広告部門の頑張りによって、新しい広告主も少しずつ増えており、十二月も前年比で一〇〇%を上回りました。今年は本格的な震災復興などもあり、景気が腰折れすることなく、持ちこたえてくれるようにと祈りたいところです。本社としては、引き続きコスト削減に

努め、販売、広告を中心とした営業努力によって乗り切っています。懸念となっている年金制度改革については、現役社員よりも年金を受給しておられるOBの数が多くなり、どうすれば安定的な企業年金を維持していけるのか、皆様方のご意見も伺いたいと考えています。昨年、日経新聞に続いて、有料の電子版事業に踏み出しました。「朝日新聞デジタル」を五月に創刊、八月から課金がスタートしましたが、現在は、有料の読者がようやく六万人に届いたところです。

「朝日新聞デジタル」のスタートには紙の新聞と競合することがないようにと検討の結果、紙とデジタルの「併読」を基本とし、販売店の皆さんには読者管理の仕事をお願いして、その報酬をお支払いする、つまり、読者を獲得し、その読者を維持するためにASAの力を借りるビジネスモデルにしたわけです。この一年間で朝日新聞と読売新聞の販売政策が大きく違ってきました。朝日新聞は一昨年の二月から大震災を機にABC部数で八〇万部を割り込み、現在は七七〇万部になっています。一方、読売新聞も震災で七万部が失われましたが、昨年十一月には千万部を回復しました。

朝日新聞の基本的な考え方は「できる限り販売現場の実態に合わせた販売政策をとろう」ということです。部数については、ABC部数ではなく、実際に読者にお金を払って購読していた「実配部数」を重視することにしました。「実配部数」を増やすことが販売店の経営基盤の強化につながり、結果として本社のメリットになるという考えからです。一方、読売新聞は「千万部という目標があるからこそ販売店に頑張ってもらえる。目標がなければズルズルと後退する。ここは我慢のしどころ」と考えているようです。「販売現場の実態に合わせて」という朝日と、「ここが我慢のしどころ」という読売と、どちらの考え方が正しいのか。答えはまだ出ていません。朝日と読売の熾烈な戦いによって、どちらの販売網が勝ち残るのか、いずれ、答えが出てくると思います。全国販売網のあり方についても、朝日新聞は新しい方針を打ち出しました。日本地図を開いて、「攻め」の地域と、「守り」の地域を分けて、過疎地の販売店については、地方紙などの話し合いによる「合売店化」も視野に入れた再編成を試みることにしました。消費税問題は、二〇一五年ごろに税率が十%前後にアップされる可能性を踏まえて準備を進めておかなばなりません。仮に、「軽減税率」が適用されないこととすると、朝日新聞では一%で三十億円近く、五%アップなら一四〇億円規模の税額アップとなります。新聞業界も一気に流動化し、全部の新聞社が生き残るのは難しいという事態になるかもしれません。幸い、朝日新聞社は財務体質も健全であり、どのような事態にも対応できる体力があります。朝日新聞が、さらに活力ある企業へと変わっていくためには、経営陣も新しい時代を切り開いていく若い世代へと、バトンを引き継ぐ時期がきたように思います。この点もしっかり対応していきます。旧友の皆様方には引き続きのご支援を、そして時に厳しいご叱声を賜りますようお願いいたします。

震災・原発報道にさすがの評価 頼りになるのはやはり朝日新聞

朝日の真価調査報道

最近の朝日新聞で反響をよんだ記事、あるいは高い評価を得た連載は、いずれも記者クラブから飛び出した記者たちが、手間ひまをかけて、深く掘り下げた取材を試み、懸命に努力した成果です。私は今年の新年の挨拶で編集部門の皆さんに「記者クラブに頼った取材ではなく、独自の調査報道にもっと力を入れてほしい。多くの読者から『さすが朝日』と言われる質の高い紙面づくりをしよう」と呼びかけました。朝日新聞が読者の期待に答えていくには、「どの新聞も同じ」という横並びから脱すること、そして、記者クラブ

に依拠した取材よりも、手回ひまかけた「調査報道」に力を入れる必要があると思っています。本社の経営状況についてご報告します。二〇一一年度上期の中間決算は、震災で広告収入が大幅に落ち込んだことから、営業損益、最終損益ともに赤字でした。しかし、広告部門の頑張りによって、新しい広告主も少しずつ増えており、十二月も前年比で一〇〇%を上回りました。今年は本格的な震災復興などもあり、景気が腰折れすることなく、持ちこたえてくれるようにと祈りたいところです。本社としては、引き続きコスト削減に

努め、販売、広告を中心とした営業努力によって乗り切っています。懸念となっている年金制度改革については、現役社員よりも年金を受給しておられるOBの数が多くなり、どうすれば安定的な企業年金を維持していけるのか、皆様方のご意見も伺いたいと考えています。昨年、日経新聞に続いて、有料の電子版事業に踏み出しました。「朝日新聞デジタル」を五月に創刊、八月から課金がスタートしましたが、現在は、有料の読者がようやく六万人に届いたところです。

「朝日新聞デジタル」のスタートには紙の新聞と競合することがないようにと検討の結果、紙とデジタルの「併読」を基本とし、販売店の皆さんには読者管理の仕事をお願いして、その報酬をお支払いする、つまり、読者を獲得し、その読者を維持するためにASAの力を借りるビジネスモデルにしたわけです。この一年間で朝日新聞と読売新聞の販売政策が大きく違ってきました。朝日新聞は一昨年の二月から大震災を機にABC部数で八〇万部を割り込み、現在は七七〇万部になっています。一方、読売新聞も震災で七万部が失われましたが、昨年十一月には千万部を回復しました。

●●●喜寿記念講演●●●

朝日OB・新聞記者として
何をどう書くべきか悩む
轡田さん

喜寿代表 轡田隆史さん

痛い！朝日の言葉には灯がともっていない



講演する轡田隆史さん

喜寿だなんて知らずにいました。本日は会費メンジヨで恐縮です。感謝します。

さて三月十二日、やっとのことで帰宅すると、二万五千冊ほどある蔵書の一部が崩れて、その下に一枚の封書がのぞいていました。

喜寿だなんて知らずにいました。本日は会費メンジヨで恐縮です。感謝します。

局の松本得三支局長や新人のほくも、手紙の主の、取材先でお世話になった女性も笑顔の「わんこそば」の写真と、ラジオで書きながら筆写したという、作家・新井満の自由訳「般若心経」が出てきた。

般若心経は、「人間ははかなれいのちを奪われて、家はただ石の門柱が残るのみでした。以来、その手紙のことは、座右の銘となりました。

新聞の役割はことばでの闘い
自覚せよ力のあることば、失うな商品力

五年前に釜石の旧友から届いた手紙で、もちろん拝読しておりますが、本の間にまぎれて行方不明になっていたのです。

無残手紙の主
津波の犠牲に

不安に駆られながら改めて開くと、昭和三十四年、盛岡支

い存在だが、生まれる意味があるから生まれてきた。自分以外の他者と、人間以外の無数のいのちのため、あなたでなければ果たせない、あなただけの役割を果たすためにだ」と語っていた。

手紙を手に釜石を訪れると、その人は夫とともに津波にのみ

自分の果たすべき
役割問う

朝日OBであり、いまでも

とはいえ、これまで以上に酒量が増えて、みずから「げけ酒」と称している日常でもあるのですが……。

ヤーナリストの端くれであるほうが果たすべき役割とは何だろうか？ 週刊誌（週刊現代）や月刊誌に拙い連載を持っているけれど、何を、どう書くべきなのか？ 朝日新聞の果たすべき役割とは何なのか？ 日々、自分に問いかけるようになりまし

た。

「石と霧のあいだで／ぼくは／休日を楽しむ。大聖堂の／広場に憩う。星の／かわりに／夜ごと、ことばに灯がともる……」

「朝日には、ことばに灯が、ともっていないじゃありません

んか！」

毅然としてはつきり 言う力

なるほど、このごろ講演会の質問でも、いろいろな会合でも、しきりに投げかけられる批判だ。ことばの力とは、いうべきことを毅然として、はつきりいう力でしょう。

ところが政治問題となると、どこでだれが会ったかわない、滑った転んだで、落第した元首相や被告人である政治家に偉そうなことをいわせている。「東北の大災害どこ吹く風じゃないか」と投書欄にも怒りの声がある。

かの大学者、丸山眞男に「政治部」というけれど実際は「政界部」にすぎないと、からかわれたのは五十年前のことでした。

かつて政治の不祥事があると

社会部は勇み立ったもので、ついには某政治家邸の門前に「イヌと社会部入るべからず」という看板が立ったほど（伝説ですが）なのに、いまは毎日の紙面を見てもいたっておとなしい。

もちろん昔はよかったなんていうつもりはありません。「こ

良質の連載がつづいていました。

うれしい「さすが朝日」の声

さすが朝日、という声をあちこちで耳にしているのですね。い。ところがぼくはといえば、お前は「容認」のころ一体何をしていたんだ！ といわれそう

なので、言い訳じみた文章にな

つてしまつて恥ずかしい。かつて「素粒子」時代に読売の渡辺恒雄さんに「大嫌いなコ

ラムだ。血圧があがるので読まないようにしている」とお叱りを受けたが、その読売が昨年九月七日付社説で、十二年前ぼくがテレビのニュースステーションで語つて、批判されたコメントを、間接的にですが「応援」してくれろという皮肉が起きた。九九年九月、東海村JCO臨

界事故が発生して二人が死亡したとき、「本質的には町の中で核実験をしているのと同じ。ヒ

ロシマ・ナガサキ・第五福竜丸の教訓が生かされていない」と

コメントしたら、「あれを核兵器の実験と同一視するのはいいすぎ」と局内でも批判されたのです。

ところが昨年九月の読売社説は「原発は抑止力になっているから維持しよう」といったような意味のことを書いた。原発は本質的には核兵器なのだ、とな

れば十二年前のぼくのコメントとほとんど同じじゃないか！

核兵器廃絶の国民の声崩すな

まあ自分のことはどうでもよく、ここで重要なのは、核兵器廃絶の国民の声が、いまや足元から崩されていることです。

ことばの力を失つて安閑としてはいられない。わたしたちの役割を、あらためて自覚しなければなりません。

新聞はことばでできている。われわれの商品はことば、力のあることばなのです。朝日新聞の役割は、ことばで闘うこと。ちつとも動かないと

いわれる若者たちだつて、反ゲンパツのデモに参加する時代です。

酒も入らないうちから大声でクダを巻いているようで申し訳ありませんが、喜寿らしさといえば、ぼくはいま超薄紙オムツをしています。快適です。必ずしも漏らすわけではないけれど、不安なしに歩き回り、飲み回るためです。

われら仲間の中には体調すぐれず、足に問題をかかえた方もあるでしょうが、少なくとも精神だけは、紙オムツで、どこだってドンドン歩き回るような気分でやろうじゃありませんか！

（メモだけで即興でしゃべる習慣です。アヤシイ記憶をたどつて再現しましたが、実際の発言と違つたり補足した部分もあります。お許し下さい）

般若心経に教えられ座右の銘に ことばの力闘う力感じない最近の朝日

平成24年 新年総会出席者

喜寿出席者

(出席者22人)

- (い) 飯田秀雄 飯田正美 飯野幹雄 池内紀昭
- (あ) 相沢守也 青山 勇 (計285人)
- (か) 鍋木 進
- (き) 北尾栄二
- (く) 轡田隆史
- (こ) 後藤和雄
- (さ) 坂間之夫 佐久間明
- (せ) 仙名 紀
- (し) 鳥戸一臣
- (た) 竹内實昭 竹村文雄
- (な) 中沢昌子 永田芳男
- (は) 林 常蔵 林 信晴
- (ひ) 久富道生 平野新介
- (ふ) 藤巻 隆
- (み) 宮坂秀一 宮澤恭人
- (や) 矢沢幹夫 築場敏子

- (か) 池田 守 池田正勝 石井忠之 石井哲次郎 石岡統明 石川喜代司 石倉豊司 板垣 誠 板津直成 伊藤 壯 伊東鈴男 伊藤裕造 稲川 伸 稲永金仁 乾 雄成 岩松幸正
- (こ) 上田久行 牛場昌夫 内山 眞 内山鶴雄 宇野勝己 海野 武 梅本洋一
- (お) 大串喜胤 大沢弘武 大重二夫 大野功雄 大屋雅之 岡田 肇 岡田和巳 岡部匡克 岡部康世 小笠原将 小竹茂徳 小田川興 小野恵夫
- (か) 香月浩之 梶 光雄 粕谷日出夫 片岡久明 片山朝雄 加藤嘉照 加藤次一 叶内 均 鐘ヶ江健児 金子良三 加納 隆 加納安實 蒲田浩二郎 亀本泰夫 唐木田卓司 軽部 平 軽部信行 川戸弘次 川名 宏 川辺久信 川又健一

- (き) 菊池 武 菊地正則 菊原陸夫 喜久村繁 岸 栄輔 岸田隆秀 城所一郎 木村 繁 清時竹彦
- (こ) 草鹿 恵 工藤叶二 久保 優 窪田康孝 栗原裘哉 黒川ハジメ 黒田正純 桑原章輔
- (こ) 高口信行 小坂健介 児玉浩憲 後藤 襄 後藤清光 小西初彦 小林 功 小林 進 小林清吉 小林三千夫 小松 直 五味秀雄 山光雄 小山千宏 権藤 満 近藤行雄
- (さ) 斎藤幹雄 斎藤善男 坂井清保 坂卷 武 崎川洋光 作間敏夫 桜井孝子 左近允輝一 笹井輝雄 佐々木博志 猿見田肇雄
- (し) 志賀 浩 静井貞夫 志賀 實 柴 昭二 柴田眞樹 柴田利夫 芝 実夫 島崎兵助 清水 勝 志村 勇 志村和雄 下村満子 甚野隆正

- (す) 数度富夫 菅原義一 杉谷隆司 鈴木聞二 鈴木福松 鈴木益民 須田 徹
- (せ) 善富治昌
- (そ) 相馬晃一
- (た) 高木敏行 高見弘保 高垣徹蔵 滝下 修 田口正治 詫摩俊一 竹市義弘 竹内恒夫 竹田 純 武田 透 田中豊蔵 田中右太生 田辺 功 田辺昇一 谷 義郎 谷口富喜男 田谷宣夫
- (ち) 中馬清福
- (こ) 鶴谷守男
- (て) 寺田達雄 寺田眞文 照山恵美子
- (と) 徳江景英 戸引和夫 都丸 司 富田順也 富森叡児
- (な) 中江利忠 中北宏八 中沢信男 中島 泰 中島清成 中島富次 中島善範 永田清春 中野義次正 中野 劼 中野晴文 中村糾造 中村雅俊 名倉正昌 生田目由夫

- (に) 西脇 勝 蛭川真夫 二本柳典彦
- (の) 野地一也 信澤秀男 野本 登
- (ほ) 長谷川徹 長谷川敏郎 畠山哲明 畠山弘道 服部豊男 初山有恒 羽鳥健一郎 羽生 弘 羽原清雅 浜田 隆 林 荘祐 原 敏博 原田利次
- (ひ) 平賀義男 比留間悦雄 広橋敏栄
- (ふ) 深草眞一 福岡照夫 福田喜大 藤田修三 藤田 実 藤野常昭
- (へ) 別府次郎
- (ほ) 宝明美男 星野富栄 細川淳一 細田晴夫 洞口和夫 堀上 謙 本多民明
- (ま) 馬来勝彦 牧野詔正 牧野信彦 松 功 松井 茂 松永健夫 松本仁一 松本精次 松本秀男 松山幸雄
- (み) 三浦昭彦 三浦義晴 水川 毅 水木初彦 溝部忠増 三石 昭 三野孝文 水戸克秀

- (む) 村野 坦 宗田文隆 村上吉男 村田敬吾
- (も) 森 一平 森 修二 森 治郎 森下 昇 森精一郎 森田恭生 諸 寿子
- (や) 安中宏明 柳瀬幸洋 山川三千雄 山越英一 山崎利治 山崎英明 山下道照 山田 弘 山村行志 山本 武 山本久二男 山本祥之 山森久義
- (ゆ) 雪江武雄
- (よ) 横田稲光 吉川 宏 吉澤忠一 吉田耕司 吉田成村 吉田良吉 吉村功志
- (わ) 和井田祐三 渡辺興博 渡辺 晋 渡辺 登 渡邊 宏 渡邊樸夫 渡辺幸男 渡辺義也 渡部二六
- (い) 寄付

▽ありがとうございます。

溝部 忠増様 五千元
中江 利忠様 五千元
築場 敏子様 五千元



田中豊蔵さん、秋山社長、宮坂秀一さん



志賀浩さん、岡田和巳さん、中江会長、山崎英明さん、叶内均さん



矢沢幹夫さん、轡田隆史さん



香月浩之さん、富森叡児さん、中島善範さん



高木敏行さん、溝部忠増さん



若宮啓文主筆、中馬清福さん、村田歆吾さん、草鹿恵さん、池内紀昭さん



三浦昭彦さん、牧野信彦さん、竹田純さん、権藤満さん、加納安實さん



桜井孝子さん、築場敏子さん、諸寿子さん



本多民明さん、福岡照夫さん、梶光雄さん、谷義郎さん、山下道照さん、青山勇さん、川又健一さん



蒲田浩二郎さん、亀本泰夫さん



水戸克秀さん、五味秀雄さん



甚野隆正さん、広橋敏栄さん、永田芳男さん、杉谷隆司さん



栗田房穂さん、下村満子さん



元気に顔をそろえた元・芝浦發送部の仲間達



吉村功志さん、後藤和雄さん、安藤保雄さん、松永健夫さん



藤田実さん、中江会長、鐘ヶ江健児さん



和井田祐三さん、藤巻隆さん



小田川興さん、蛭川真夫さん、松本仁一さん、芝實さん、村上吉男さん



和気あいあい、話がはずむ会員仲間



渡辺登さん、阿部征夫さん



原敏博さん、鏑木進さん、加藤嘉照さん、吉田成村さん、石井忠之さん



菅原義一さん



渡辺宏さん、加納隆さん、中江会長、渡辺槇夫さん、小山千宏さん



「みんな元気でーす」と元・工務局有志



広橋敏栄さん、畠山哲明さん



竹内實昭さん、石岡統明さん



鐘ヶ江健児さん、長谷川徹さん、牧野詔正さん、高口信行さん、岡田和巳さん、洞口和夫さん